ポータブル超音波検査推進による患者搬送時の看護師業務負担軽減にむけての取り組み

◎井上 佳奈子[1)]、濱本 将司[1)]、川久保 智美[1)]、藤上 祐子[1)]、森 俊明[1)]、川野 和彦[1)]、犬丸 絵美[1)]
飯塚病院[1)]

【はじめに】病棟患者の生理検査は基本的に検査室での検査となるが、ベッドでの搬送となる患者も多く、看護師の時間的負担が大きい。また、検査室もベッドが複数台搬送されることで通路や待機スペースが狭くなり、移動に手間がかかっている。そこで、ポータブル検査が必要な病棟を選別し、技師が病棟へ出向く件数を増加させることで看護師のタスクシフトが可能になるのではないかと考え、取り組みを行ったので報告する。

【現状の把握】

①ポータブル検査の対象病棟選定に向けて現状把握を実施した。項目はポータブル件数、ベッド・ストレッチャー件数、シリンジや酸素投与の有無、病棟からの到着時間である。

②ポータブル検査では環境面、機器設置や移動に要する時間のロス等検査室で実施するよりも技師の負担が大きい。アンケート及び現状調査にてこれらの問題点収集を実施した。

【結果解析】①の結果をそれぞれ点数化・集計を行いポータブル検査の需要が高い病棟の順位付けを行った。

②より a)症例によっては検査結果に対する不安（主に明るさに起因）があること、b)時間ロス軽減のため病棟スタッフに協力依頼（体位変換や検査スペース確保）、c)患者スケジュールを把握（他検査やリハビリなど）、d)患者状態の把握（介助の必要性について）などが重要要因であると考えられた。

【対策立案および実施】①の結果から上位 4 病棟を選出し、ベッド搬送となる患者に対しポータブル検査を実施した。

②に対し a)ポータブル検査基準作成、b)協力依頼項目一覧および必要なスペースの数値化、c)および d)病棟との情報共有方法の確立を行い、検査を実施しさらなる改善点の有無を検討した。

【まとめ】十分なデータ解析を行うことでポータブル検査を必要としている病棟の選出や効率的な検査のための対策を行うことができた。発表ではタスクシフト可能となった時間や今後の課題・展望についても報告する。

連絡先：0948-22-3800（内線 5259）